

北欧を歩いて、北欧を書いて ——保育のことを勉強しながら——

総合図書館館長

荒井 利



幼児保育のことをテーマにして、私は保育関係の教員をずっと続けてきました。

それと並行して、スウェーデンなど北欧の国々の保育のありようや、それを取り巻くさまざまな文化や自然環境などにも興味を持ち続けてきました。

きっかけは、創立まもないスウェーデン社会研究所のメンバーに加えていただいたこと、同世代のスウェーデンの友人にめぐまれたこと、さらに当時としては思い切ってスウェーデンに出かけて、センスや発想の見事さに目を見張ったこと、などです。

結果、40年ほどスウェーデンとおつき合いをすることになりました。

保育について最初に驚いたことは、子どもが入園する際のことです。最初の2週間くら

いは、親も一緒に園へ通いなさい、というのです。しかも、毎日、違った時間帯に滞在して、わが子と共に過すべきだというのです。

そうすると、親は園生活の1日の流れを理解することができるし、そのうちに子どものほうから、「ボク、トモダチトアソブカラ、ママ、サキニカエッテ！」というようになる、という説明なのです。このことは、大変な驚きでした。

『保育を学ぶ若い人たちへ』(家政教育社)や、『育児と保育のあいだ』(川島書店)、それに『新世代の保育をデザインする—スウェーデンの試みをヒントに—』(筑摩書房)といった本に、このような驚きや新鮮な印象を、一生懸命に書きつけました。

園庭も、日本のそれとはまるで違います。学校の校庭を小さくしたような園庭ではなく、自然のままの広がりを、起伏や木立などをそのまま生かして園庭としているのです。

ですから、園の名前に「牧場」とか「斜面」といった言葉がつくのが多いのです。懐かしい名前では、「白樺の斜面保育園」とか、「葉っぱの牧場保育園」、あるいは「バター・カッ



「保育園」といったものが思い出されます。とても牧歌的です。

園舎も違います。ひとことで言えば、学校の校舎をモデルにしたような設計ではなく、居住性をバックボーンにした造りなのです。

園庭や園舎、さらにはランチルームやプレイルームなどについては、『幼児保育への新しい地平線－「比較保育論」のすすめ－』(明治図書)など、明治図書から「シリーズ・保育園生活のデザイン」というタイトルで、15年ほどかけて書き続けた一連の本に、たくさんの写真とともに書き込みました。

このように、スウェーデンをはじめノルウェーやフィンランドなど、北欧の保育を勉強しているうちに、当然のことながら1900年に世に出た、かの有名な『児童の世紀』と格闘することになりました。著者は、エレン・ケイ(Ellen Key, 1849～1926)というスウェーデンの女性です。

学会で、テーマを立てて少しづつ発表したり、いくつもの保育雑誌に書いたりしてきましたが、『エレン・ケイ 保育への夢』(フレーベル館)という本に、一応まとめた形で執筆しました。

ところで、エレン・ケイという名前と、『児童の世紀』という本の名前は、日本の教育界や保育界では有名なのですが、深く読み解いているらしい人はあまり見当たりません。そこで、保育関係の大学や短大などでつくっている団体、全国保育士養成協議会の年に1度のセミナーで、彼女の考え方について講演をしました。2003年の秋、会場は箱根の大きなホテルでした。

700人あまりの人が耳を傾けてくれたのですが、その際に録音されたものを、『スウェーデン 水辺の館への旅－「児童の世紀」をたずさえて－』(富山房インターナショナル)の中に収めました。

最近のことですが、昨年の秋に、「NPOほいくゼミナール・21」という保育についての勉強グループの仲間とともに、「スウェーデンの保育 再発見の旅」という名の旅を楽しんできました。

仲間は全員が保育のプロですので、写真のアングルが見事です。そこで何枚もの見事な写真を活かして、小学館の月刊保育誌『Latta』(2009年1月号)に、「北欧・スウェーデン保育紀行」という一文を記しました。また、フレーベル館の月刊誌『Nocco』(2009年2月号、3月号)には、あちらの園生活の楽しさと、保育内容の面白さについて書きました。日本中の多くの保育者の方々の目に触れ、刺激になればと思ってのことです。

さて、エレン・ケイの『児童の世紀』の中に、こんな言葉があります。

われわれは子どもの心に、

美しい糸をていねいに

織り込まねばならない。

なぜなら、いつの日にか、

これらの糸が

世界をおおう布として

織りあがることになるからだ。

この一文は、私が苦心して訳したものなのですが、すばらしい発想の文章なので、最近の拙著の中に書き込みました。『保育者のための 世界名作への旅』(富山房インターナショナル)という本です。

スウェーデンなど北欧の国々へ出かけては、見たり、聞いたり、読んだり、書いたり、語ったりして、気がついたら40年の月日が経っていました。

遠隔地のことゆえ多少の苦労はしましたが、よかったです。比較文化論的なセンスが少しは身についたのかな、と感じているからです。

読書会の楽しみ

教育学部・准教授

平田乃美



読書会がブームなのだそうです。友達とカフェで気軽にというのから、インターネットのファンサイトでバーチャルに、など最近ではいろいろな形式があるようです。好きな作家や作品について語り合うことだけを目的とした時間、楽しく贅沢なひとときです。アメリカでの流行の火付け役といわれるのは『ジェーン・オースティンの読書会』、映画化もされた人気小説です。仕事や家庭、恋の悩みを抱えた21世紀の女性たちの日常が、19世紀イギリスの女流作家ジェーン・オースティンの読書会を通して描かれます。

読書会はおもしろそうだけど、授業や部活動が忙しくて、または本に限っては趣味の合う友達がいなくて、という学生の皆さんでしたら、ちょっと寂しいですけれど一人で開催できる小さな読書会もお勧めです。例えば、作品を読み終えたら、感想を日記や手帳に一行でも書いてみます。後日、半年、一年、数年前の自分の感じ方を知ることは案外おもしろいものです。また、巻末の解説や書評を読み集めるのも一案です。例えば、サリンジャーのある作品は、こんな風景から始まります。



場面はアメリカ東部の小さな大学町の鉄道駅、季節はアイヴィ・リーグに属する名門大学間のフットボール対抗試合が話題になる晩秋あるいは初冬、分厚いコートを着込んだ学生たちの中、一人ウールの裏地をつけたバーバリのレインコートにえび茶のカシミアマフラーの学生。上着の内ポケットには、何度も取り出したらしく、こなれてきたびれた手紙の封筒…。

訳者の野崎孝は、「冒頭の一節を読んだだけで、アメリカの読者には、陽の光から空気の冷たさから、待合室のたたずまい、学生たちの話し声、そのとっている格好までがまざまざと感得され」、説明的な心情描写はほとんどないのですが、そこには登場人物のお洒落にこだわる性格や恋人との微妙な状況をうかがわせるサリンジャーの周到な配慮があることを解説しています。こうした優れた解説との対話もまた、小さな読書会といえるでしょう。

20世紀末、ジョン・アーヴィングなどとともにアメリカや日本の若者に支持されたレイモンド・カーヴァーもまた、一瞬の断片から心に染みる感慨を読者に惜しみなく与えてくれる作家でした。ささやかな日常の断片の中に、後になって振り返れば「ああ、あの時が」と合点する、人生の絶頂や転換点が潜んでいることを、鮮やかに描いてみせてくれました。どの瞬間が心に焼きつくのかは読者一人ひとり違うことでしょう。カーヴァーの理解者であった詩人テス・ギャラガーは創作科での詩

の講義について語る中で、こう述べています。

「みんながワンドフル・ライターになると
は思わないけど、グッド・ライターはでてくる
でしょう。そうでない人もグッド・リーダー
(優れた読者)にはなるでしょう。それでいいんじ
ゃないかしら。グッド・リーダーにな
ることができる、人生そのものに対する見
かたも変わってくるはずよ。大学教育とい
のもそういうものなのよ」(『レイモンド・カ
ーヴァーと新しい保守回帰の波－インタビュー
とその作品論－』村上春樹著より)

もちろん、グッド・リーダーとなり人生に
に対する見方が変わることが、幸せな人生につ
ながるかどうかは分かりません。村上春樹は
ある作品の中で、「楽器が弾けるというのは
楽しいことなんだろうね」という問いかけに
対して、主人公の「僕」にこう語らせます。

「うまく弾ければね。でも、うまくなるためには耳がよくなくちゃいけないし、耳がいいと自分が弾いてる音にうんざりしちゃうんだ」。

長い人生、同じ本を再読するそのときどき
で、感じとれるものは同じではないでしょう。
繊細で不安定な時期だからこそ心震える機微
や情緒もあれば、少々のことには鈍感になる
ほど強く逞しく成長したからこそ見える本質
もあるはずです。自分自身の人生と重ね合わ
せて、魅了されたり、うんざりしたり。趣味
としての読書の楽しみは、優れた読者である
ことよりも、むしろ偏狭な読者であることには
こそあるのかも知れません。読後の感想は、
そんな日々変化していく自分の鏡です。大き
なあるいは小さな読書会、皆さんもぜひ一度
開いてみてはいかがでしょうか。



図書館HPへようこそ

大学図書館では、図書・雑誌などの従来の図書館資料
のほかにWebサイトを通して情報を提供しています。

図書館のホームページをご活用ください

● 図書館HP → 資料をさがす → レファレンスガイド

■ 図書館を利用しよう

図書館を使いこなすためのヒントです。

図書館クイックガイド

図書館まで知識～図書館用語解説～

新聞記事の探し方

OPAC（蔵書検索システム）で資料を探そう

パーソナルサービスを利用しよう

■ 分館ガイド

分館を利用する際に役立つ資料を集めました。

法令名の略語

分館所蔵の判例集、定期刊行物の略称一覧

分館所蔵の紀要略称一覧

分館4階書架（和書）

● 図書館HP → 資料をさがす → 図書館にある情報 → フローチャート式「情報の探し方」

とてもわかりやすく、資料の探し方が自分で学べます。

ささやき

大学生活をゆたかに過ごすために、
図書館を生活スペースに入れることを
お勧めします。明るく開放的な雰囲気
の中にあらゆる情報が盛りだくさん。そして、その図書館をさら
に有効的に利用できる秘訣は、何と言っても「使い慣れる」こと。
新聞有り、パソコン有り、個人自習室有り、AVルームで映画も
視聴できます。さらに、「へえ、そうなの…」という発見がきっと
あると思います。図書館の入館ゲートに学生証をタッチさせる
習慣をつけてみては、いかがでしょうか。

平成21年4月1日 発行

編 集 図書館だより編集委員会

発 行 白鷗大学総合図書館

〒323-8585 栃木県小山市大行寺1117

(0285)22-9737 (直通)

ホームページ <http://web.hakuoh.ac.jp/lib/index.html>

印 刷 (株)尚文堂印刷所

